

流布本『清少納言集』注釈稿 二

金井利浩

本稿は、前稿「流布本『清少納言集』注釈稿 一」（本誌第二九号、二〇一六年三月発行）の続稿である。

ひとえに、村井順や萩谷朴らによって示された『清少納言集』は「流布本」の読みを、或いは嗣音し、或いは見直してみたいとの念に基づいてする、試行であり私考である。

今回もまた、失当の多からんことを恐れている。ご斧正を乞う次第である。

「凡例」

一、【本文】は、笠間影印叢刊26『清少納言集』に拠り、改行の様態はそのままに、仮名・漢字は現行のそれらをもって掲出した。なお、和歌に通し番号を付した。

二、【釈文】は、【語釈】を経て【通釈】に至る根拠としての表記をもつてする本文であると同時に、【語釈】と【通釈】とを経て還り戻る原点としての本文である。すなわち、【本文】の仮名に漢字を当て、漢字を仮名にひらき、仮名に濁点を加えることがあるほか、詞書には句読を加点することもある。

三、【語釈】は、【通釈】の根拠たりうるところを示した。なお、●印を冠して掲げる見出し語句は、【本文】の表記による。

四、【通釈】は、【釈文】の意味するところを現代日本語表現をもつて示した。なお、和歌に対応するところには、和歌と同じ通し番号を付した。

五、【補説】は、【本文】について、【釈文】【語釈】【通釈】の範囲には余るところに言及した。

六、学恩を忝うした、また折々に引く諸家の御著は、左の略称ないし著者姓氏をもって示した。

【講座】

橋本不美男「清少納言集」（枕草子講座第一巻）所収

有精堂 一九七五

【選書】

村井 順 「清少納言」（笠間選書）

笠間書院 一九七七

『全歌集』 萩谷 朴 『清少納言全歌集 解釈と評論』

笠間書院 一九八六

『歌人抄』 清水 好子 『王朝女流歌人抄』

新潮社 一九九二

『大系』 佐藤 雅代 『清少納言集』（和歌文学大系20のうち）

明治書院 二〇〇〇

『歌人選』 坪 美奈子 『清少納言』（コレクション日本歌人選007）

笠間書院 二〇一〇

七、【語釈】ならびに【補説】の項においてする引用のうち、和歌については原則として新編国歌大観に従ったが、八代集は新日本古典文学大系に、万葉集は新編日本古典文学全集に拠った。ただし、いずれの場合も、読解の便をかんがえて表記を改めたところがある。散文作品については、新日本古典文学大系や新編日本古典文学全集など通行の本文を用いたが、『枕草子』の章段数のみは、新潮日本古典集成のそれに従った。

八、【語釈】ならびに【補説】の項における記述について補注を要する場合には、それぞれの歌ごとに、当該の【補説】の後に、【注】を置いた。

【本文】

きよ水にこもりたりしに大殿の上のゐ所から

いひをこせたまへりし

6 思ひきや山のあなたに君を置いて独みやこの月をみむとは

【釈文】

清水に籠こもりたりしに、大殿の宿直とゐとじ所から

言ひおこせたまへりし

思ひきや山のあなたに君をおきて独り都の月を見むとは

【語釈】

●きよ水にこもりたりしに―「きよ水」は清水寺。平安京から至近であり、長谷寺・石山寺とともに女性が参詣・参籠する代表的な寺院であった。本尊は十一面千手観音。興福寺に属し、真言・法相兼学。なお、「きよ水」は、本詞書と同じ「清水にこもりた

りしに」で始まる第二二四段のみならず第一一五段、第二一二段などに見られるように、『枕草子』において出来事の場合や観察の対象となっており、そこにはある種の嗜好や指向性を認め得る。「こもり（こもる）」は言うまでもなく、祈願のために寺社に泊まりこむ、参籠する、の謂いだが、第二二四段の「こもりたりしに」ともども、それが清女の人生史上の何れの時点での、如何なる事情を背景にした、何を祈願の目的とする参籠であったのか、不明とするほかはない。【補説】参照。●大殿の上のゐ所から―「大殿の上」が誰を指示するかをめぐって議論があるが、そもそも「大殿の上」をプロパーとして認める場合に気になるのは、直後の、その「ゐ所」から、との措辞のありようである。「ゐ所」がひとつの情報であるとして、それはわざわざそれと措定されるに足る意義を有しているのか、端的に言えば、「大殿の上から」で十分ではなかったか、ということである。かくて、ここでは、「上」を「と」（字母「止」）からの誤写と見て、「とのゐ所」へと復しておくこととする。通例、【釈文】に作ったように、「宿直所」との漢字を当てる。撰関や大臣・大納言などの宿直・休憩の料として宮廷内に設置された部屋。「直廬」じきよとも。なお、撰関の場合には、天皇の側近くで政務を執る必要から、それを事実上の執務室として用いる場合もあったという。もし原姿が「とのゐ所」であったとすれば、「とのゐ所から」とは、「大殿」が「執務中ながら」とのニュアンスを込めんとして挿まれた句でもあったか。さて、改めて、「から」は、ここでは動作の空間的起点を表しているが、中世の作品においてはその「五十〜百倍以上使われてい」（大野晋編『古典基礎語辞典』。「から」の執筆担当は我妻多賀子）、中世前期まで圧倒的な勢力を保っていたとされる「より」ではないことについて、『選書』が不審を唱えている。いかにも『枕草子』には当該の用法の「から」は皆無であり、本詞書への清女の不関与が想われるところではある。ただし一方で、『枕草子』にあまた認められる「より」も、一文ないし一文節のなかで「おこす」（『枕草子』に「言ひおこす」は用いられていない）に掛かるかたちで用いられたのは、「ひとの国よりおこせたる文の、物なき」（第二二段）とあるのが唯一例であって、清女が「いひおこす」との取り合わせにおいて「から」を用いなかったその確証を得る手立ては無きものとも思われる。それはさて、「大殿」とは誰であるうか。ここでも、『枕草子』では、と引き合いに出せば、一つは、かの長徳の変に係ってと思しい清女の里居をめぐって同僚の女房たちが立てた、「左の大殿方の人、知る筋あり」（第一三六段）との噂、もう一つは例の耳敏き大藏卿の逸話において取り沙汰される、道長の猶子藤原成信に比定される「大殿の新中将」（第二五七段）との称名、それら二つに徴して明らかかとおり、「道長」を指示するばかりなのである。ちなみに「道隆」は、『枕草子』においては、「殿」（第九九段、第一三六段など）ないし「故殿」（第一二八段など）なのであった。そうした表現の状況を向こうにして、ほんとう

に「大殿」の語を用い得る対象」は「道隆を措いて他にはあり得ないことが明白」（『全歌集』）となるのかどうか、議論の余地は残ろう。【補説】を参照されたい。●いひをこせたまへりし―「をこせ」は、「おこせ」の仮名遣いが正。さて、6番歌の詞書に「おこせたる」とあったが、其所と此所とに、かかる歌が届けられたことがあった、そういえば、こんな歌も、といった意味での連想は働いているのかどうか。一方で、先にも触れた、「清水にこもりたりしに」に始まる第二二四段における「賜はせたりし」と相並ぶ表現であることも気になるところである。それについても【補説】を参照されたい。●思ひきや―この歌、『続後拾遺』に、詞書を「清少納言、清水にこもりて侍ける比、月いとあかき夜、申つかはしける」、作者表記を「法成寺入道前撰政太政大臣」として入集する（巻第十六・雑歌中・一〇六〇）。ちなみに、その前に位置する一〇五九も、「思ひきや都の雲の上ならでこ、ろ空なる月を見んとは」（道命法師。詞書は「長恨歌のうたよみ侍りけるに」と、同じ構えを持つ。そういえば、清女の父・元輔に「思ひきや秋の夜風の寒けくに妹なき床にひとり寝むとは」と詠んだ一首があった（書陵部本『元輔集』一一五）。もつとも、「同じ国章が秋風よさむなりしをよみて侍りし、かへし」とあるその詞書の「かへし」の一語を、同集歌仙歌集本（一一）では欠いており、国章の詠であるかの趣である。ゆえに、と言ってよかろうか、『拾遺集』には「妻のなくなりて侍りけるころ秋風よさむにふき侍りければ」との詞書で国章自身による亡妻挽歌として収められてい（巻第二十・哀傷・一二八五）、『後拾遺集』では詞書を「大式国章妻なくなりて秋風よさむなるよししたよりにつけていひおこせてはべりけるかへりごとにつかはしける」として、こちらは清原元輔の歌として入集している（巻第十五・雑一・八九〇）。『拾遺集』所載歌が「思ってもみただろうか、秋風が寒々としているのに、妻がいらない寝床に独り寝しようとは」といった歌意になるのに対し、『後拾遺集』所収歌のそれは、「思ってもみただろうか、秋の夜風の寒い折、愛妻のおられない床に君が独り寂しく寝ることになろうとは」といったところになろうか。いずれにしろ、そもそも「思ひきや…ひとり…とは」との構造に、その歌意を、当事者の悲しみとも第三者による慰藉ともつかぬ体で形成せしめてしまう因由があったということだろう。翻って、その点、本集では、流布本であれ異本であれ、当事者、すなわち作歌主体の悲しみを詠んだものとして、歌意に揺らぎは発生しないものと一応は認められるようだけれども、はたしてどうか。その「当事者」、先に触れた詞書に言う「大殿」が誰か、つまるところ道隆か、道長か、との問題と相俟って、事は必ずしも単純ではないようにも思しい。

【補説】を参照されたい。なお、「思ひきや」の「や」は反語。結句の「とは」から振り返りつつ、思ってもみなかったことだ、思いもしなかったことよ、の歌意を、また場合によっては、思ってもみなかったらうよ、思いもしなかったらうよ、との意味合いをか

たどることになる。●山のあなた―「あなた」は「かなた」の転か、とも言う。『古今集』に「おそくいづる月にもある哉あしひきの山のあなたも惜しむべらなり」(巻第十七・雑歌上・八七七/よみ人しらず)、『後拾遺集』に「身をつめば入るも惜しまじ秋の月山のあなたの人も待つらん」(巻第四・秋歌上・二五四/永源法師)、私家集では『惠慶法師集』に「月の入る山のあなたの里人と今宵ばかりはみをやなさまし」(二六五)、など。●君を置いて―「置」は「置く」の連用形。「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」(古今・巻第二十・東歌・一〇九三)におけるような、さしおいて、放置し無視して、のニュアンスではなく、「大原のふりにし里に君をおきてわれ去ねかねつ夢にみえたく」(古今和歌六帖・第二・野)や「笠取の山とたのみし君をおきて涙の雨に濡れつ、ぞゆく」(後撰・巻第十九・離別・一三二六)、あるいは「君をおきていづち行くらん我だにもうき世の中にしひてこそふれ」(和泉式部日記)などに見られるように、物理的・空間的に距離を隔てて、ある場所・位置にとどめて、のニュアンスである。

【通釈】

清水寺に参籠していた折に、大殿が宿直所から詠んでよこされました(歌)

6 思つてもみませんでした。山のかなたにあなたをとどめて、私ひとりが都の月を眺めることになろうとは――。

【補説】

「大殿」が誰を指すか、それはいかにも「重大な問題」(『全歌集』)ではある。しかしながら、【語釈】で触れたとおり、それはいかにも浮動的であり、定位への道のりは遙かに遠いものと思しい。われわれはいくつかの言語状況を、いわばまさに状況証拠として採用しつつ、場合場合の可能性を探るしかないのではあるまいか、と考える。

先ずは、「大殿」が「道隆」である場合。左に引くのは、『枕草子』第二二四段である。

清水にこもりたりしに、わざと御使して賜はせたりし、唐の紙の赤みたるに、草にて、「山近き入相の鐘の声」ごとに恋ふる心の数は知るらむものを、こよなの長居や」とぞ、書かせたまへる。

紙などの、なめげならぬも、とり忘れたる旅にて、紫なる蓮の花びらに、書きてまゐらす。

清水に籠もる清女に、都に残る定子。両者は、事実上、隔てられているもようである。定子は、遙かに聞こえては消え、また聞こえては消える鐘の音に、自分の思いの数をかぞえている。その姿は弱々しげで、その営みは哀切である。いま、ここで定子の置かれている、言い得べくんば公的な場面において清女たちから見た精神面での絶対的な優位者であるのとは対極にある孤独、そ

ここに手を差しよべ、その解消に与り得る者がいるとしたらそれは誰か。みぎ『枕草子』の、「清水にこもりたりしに、わざと御使して賜はせたりし、…」と並立しているとも言うべき、「きよ水にこもりたりしに……いひをこせたまへりし」とのかたちの文言によって現出するに最もふさわしい存在は誰か――。

かくして、「道隆」が据えられてくるのである。ただし、そのうえで、道隆は、おのが孤独を嘆訴することによせて、遠回しに、定子を思い遣ってほしい内意をそこに託し込めたのであったか。いや、右の【通釈】では、いかにもそのように解しておいたのだけれども、まさにここでこそ慮っておきたいのが、【語釈】で触れた『後拾遺集』流の理解である。すなわち、

(定子中宮は) 思ってもみなかったことでしょうよ、あなたを山のかなたに置いて、自分ひとりか都の月を眺めることになるうとは……。

との、清女の父・元輔が国章への同情を寄せた歌の枠をそのまま借て、定子の父・道隆が娘・定子の許への回帰をひそやかに清女に迫った、そういう一首である可能性をも、ここに記しとどめておきたい。

次に、「大殿」が「道長」である場合。【語釈】でも触れたとおり、『枕草子』において「道隆」を指し示す「大殿」はついに皆無であるとの言語状況を最大の梃子に、詞書の背景の掘り起こしに臨んで浮上してくるのは、かの長徳の変に係る文脈であろう。『枕草子』は、清女が道長方と通じていると取り沙汰されていたことを、隠さずに記している(第二三六段)。あるいはまた、跋文の描く源経房の清女の里居訪問についても、清女を中関白家から切り離そうとする道長方の謀略であったとの可能性が指摘されている(萩谷朴説)。してみれば、この「大殿」からの一首も、そうした一連の動きのなかで、道長みずから清女懐柔の内意をこめて、あえて、あるいは、ゆえに、恋歌仕立てで詠み送ってきたものかもしれない。はたしてそれがそうだとするときに問題になるのは、というよりも興味深く浮上してくるのは、そのような一首を、『清少納言集』がここにこうして収めていたという事実である。それは、『枕草子』に記すべきを記したのと並ぶ、家集には公表裡に収めるべきを収めるという、清女の誇りの秘やかにして清かな披瀝であったのかもしれない。

【本文】

ひとたらひたりときくをいみしくあらかふに

人しりていひの、しりてよことになむ
ゆくとき、て

7 ぬれきぬとちかひし程にあらはれてあまたかさぬるよとも聞哉

【釈文】

人語らひたりと聞くを、いみじく諍あぢがふに、
人知りて言ひのしりて、夜よことになむ
行く、と聞きて

濡ぬれ衣ぎぬとちかひしほどにあらはれてあまた重ねるよとも聞くかな

【語釈】

●ひとたらひたりときくを―「ひと」は、清女にとつての「夫」、もしくはある特定の「男」を指そう。「たらひ」の「た」は、その字母を「可堂」もしくは「可多」とする「かた」の「か」が草書連綿体によって写し継がれてゆくなかで誤脱された結果、と観る。果たして復される動詞「かたらふ」は、内密のことや秘密を相手に打ち明ける意の「かたる」と、お互いに調和するという意の「あふ」とが複合したものであり、そこから、男女が親密に話し合う、言い交わす、契り交わす、の意を形成する。「たり」は、ゆらい「てあり」の約であり、状況や事態が持続・進行中であることを表す。「きく」は、既出(1・2・3番歌参照)のそれである。●あらかふに―「あらかふ」は、事の有無や成否などをめぐって、互いに相手の意見や行為を否定し、異見を強く主張し合つて対立することをいう。ここでは、清女の聞いている、どこぞの女性と親しくつき合つていふという噂を、男が真つ向から否定し、懸命の言い訳をこころみている、という構図であろう。●人しりていひの、しりて―「いひののしる」は、例えば『枕草子』における、「(蔵人ノ方弘ガ)御厨子所の御膳棚に沓置きて、いひののしらるるを、いとをかしがりて、…」(第五三段)、「『…』…」など、万づの言をいひののしるを、…」(第二七段)、「…、『さる言には、何のいらへをかせむ。なかなかならむ。殿上にていひののしりつるは。主上もきこしめして、興ぜさせおはしましつ』と語る」(第一三〇段)といった諸例に徴して明らかなどおり、複数の人びとが口々に騒ぎ立てることをいう語である。よって、ここの「人」は、「(向こうの)女性」(『全歌集』)ではなく、「世間の人」(『選書』)と定位されるべきであろう。男の抗弁を聞きつけた、男の行状を知る周囲の人びとが、事の真相の暴露に及んだの

である。●よことになむゆく―「に」の一つは衍であろう。「よこと」は「夜毎」と漢字を当て得る。「夜ごとにむ行く」で、歌の下旬の前提となる情報の根幹を担う。●き、て―この「きく」は、これまでの同語とは位相が異なる。聴覚運動から展開した、音声や言葉に基づく思惟活動によって、そのように思う、それと知れる、といった意で用いられている。●ぬれきぬと―「ぬれきぬは、濡れ衣。「ぬれころも」とも。「松島の海人の濡れ衣なれぬとてぬぎかへつてふ名を立ためやは」(『源氏物語』夕霧卷／夕霧)のように、まさに海水に漬かってたくたになった衣の意で使われた例もあるが、身に覚えのない浮名や根も葉もない噂、無実の罪を意味する歌語として用いられることが多い。「濡れ衣と人にはいはず紫のねずりの衣うはぎなりとも」(後拾遺・卷第十六・雑二・九二／和泉式部)、「濡れ衣といふにつけてやながれけんあぶくま川のなこそ惜しけれ」(堀河院百首・雑・一三八八／永縁)など。●ちかひしほとに―「ちかふ」は、元来、神に向けて述べ、祈り、約束すること。やがて、他者に向けて堅く約束したり、保証したりすること。「ほとに」は、「程に」。時間的用法と観て「…するうちに。…しているうちに」、接続助詞的用法と見て「…したのに」、いずれにも解し得る。●あらはれて―「あらはる」は、「顕る」。神仏・物の怪などの出現のほか、神仏の力や功德などが形となつて見えるようになることを表す。また、隠れていたものの姿がむき出しになる意をも表す。ここでは、さしあたり、「隠していたことが知られる。露見する」の歌意を形成しよう。なお、和歌においては、「風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり」(古今・卷第十三・恋歌三・六七一／よみ人しらす)のように、しばしば「洗はれて」の意と掛けて用いられる。ここではまた、それゆえに、「あらはれ」は「きぬ」の縁語ともなる。●あまたかさぬるよとも聞哉―詞書からの承接という観点からすれば、「よ」は「夜」であり、「かさぬるよ」も、「重ぬる夜」として、「人」が実はどこぞの女性と重ねつづけていた逢瀬の時を指し示すもの、と解いて、さしあたりはよいのである。ただし、【釈文】では「重ぬるよ」と、「よ」は仮名に作った。私見によれば、そこには、『万葉集』巻第八に収める「この花の一よのうちに百種の言そ隠れるおほろかにすな」(一四五六)と、それに和した「この花の一よのうちは百種の言持ちかねて折らえけらずや」(二四五七)とが踏まえられているからである。【補説】を参照されたい。なお、「かさぬる(重ぬる)」も、先の「あらはれ」と並んで「きぬ」の縁語である。「とも」の「と」は、諸書に「を」と翻刻されるとおり、いかにもそれと見られなくもない字体ではある。しかし、底本書写者の筆癖や字形を全篇にわたって閲したかぎりでは、むしろ「と」と判読すべきかと観る。いずれでも、歌意を取るに支障はない。「聞哉」の「聞」は、詞書閉じめの「き」と同位相であろう。「聞いて知る。耳にした言葉をとおしてそれと分かる」の意である。「哉」は、むろん、「…ことよ」とい

った気味合いの打ち出しだが、それは「人」に係る真相を知った清女の遣り場の無い無念、胸に納めがたき慨歎のしるしである。

【通釈】

あの人が、どこぞの女性と情を交わしていると私が噂に聞くのを、ひどく抗弁していると、周りの人びとがそれを聞き知って口々に言い立てて、毎晩のように通っているのだな、と分かって（詠んだ歌）

7 あなたがそんな噂は事実無根だと堅く言い切ったそばから真相は明らかになって、あなたと件の女性とは毎夜毎晩逢瀬を重ねる万の睦言を交わしていたのだと分かってしまいましたよ。

【補説】

右に試みたのは、「よ」を「夜」と「間」との掛詞と見なしての解釈である。【語釈】にも引いたが、『万葉集』は巻第八の「春相聞」は次のような贈答歌を収めている。

藤原朝臣広嗣の桜の花を娘子に贈れる歌一首

一四五六 この花の一よのうちに百種の言そ隠れるおほろかにすな

娘子の和へたる歌一首

一四五七 この花の一よのうちは百種の言持ちかねて折らえけらずや

贈歌は、この花の一よの中には数えきれぬほどの言葉がこもっている、いい加減に思うな、くらしいの意、それに対して答歌は、この花の一よの中にはあまりに多くの言葉を持ちきれなくて、花が折れてしまったのではありませんか、くらしいの意である。男の言いくさは、要するに、手折り贈るこの桜花には言い尽くせぬほどの情愛を籠めた、その思いのほどをしかと受けとめてほしい、というものである。これに女は、所詮は手ずから折取ったのではない、思いを持ってあまし扱いかねて折れてしまった花を贈ってきたのではないか、と皮肉をもって応じたのである。ここに見られるとおり、「よ」とは花びらと花びらとのあわいであり、言葉の隠蔵空間なのであった。

斯様の「よ」を清女は踏まえたものではなかったか、というのが私見の見通しである。夫と余所の女とが秘匿の「夜」と隠匿の「間」とを二つながら重ねていた事実をゆくりなくも見透かし得たことを、掛詞「よ」を含む擲楡と嗟歎の一首をもって、したたかに夫に突きつけた、と読んでみたのである。その意味では、前歌6番とこの7番とは、ともどもに前提的基層となる一首を有していた、

とも見られる。聯繫の糸はあり、と見做してよいであろうか。

以下は、付けたりである。

右『万葉集』の「よ」は、「枝」とも「花卉」とも説かれ、定解を見ていない。しかし、「言」が「隠」り得る場所としては、いづれも不適格であろう。ゆらい「よ」とは、竹の節と節との間を表し、そこから天と地との間の「世」も、ある時とある時との間の「代」も生まれたという。いづれも同根なのであった。とすれば、右の「よ」も、花卉と花卉との間、という理解で、いや理解こそがよいのではないか。「重ぬるよ」という表現に接するとき、清女にはそのことが明確に、認識もイメージもされていたと思われてならないのである。

【本文】

女のおとゝにすむときく比くらつかさのつかひにて

まつりの日たつともろともにのりて物みるときゝて

又の日

8 いつかたのかさしと神のさためけんかけかはしたる中のあふひを

【釈文】

妻のおととに住むと聞くころ、「内蔵寮くらうかきの使ひにて、

祭の日、立つ」と、「もろともに乗りて、物見る」と聞きて、

又の日、

いづかたの挿頭かざしと神の定めけんかけ交かはしたるなかのあふひを

【語釈】

●女のおとゝにすむ―「女」は「め」。異本は「め」に作る。「妻」を当てるべきを「女」とした可能性は、当然に、ある。「おとゝ」は、「おとひと（弟人・乙人）」がウ音便化した「おとうと」の異形表記。これを「おとゝ」と読んで「大殿」を当てることも、可といえは可。ただし、「かぐや姫にすみたまふとな」（『竹取物語』）といったかたちをとる「すむ」の用法に徴して、わざわざ「大

殿に」と挟む必要はあったのか、そもそも「女」と「大殿」とは結びつきとして熟しているのかどうか、不審である。翻って、本流布本表記を重視して「女のおと、」のままに従い、清女自身の「おと、」たちの中で「女の」、つまりは「妹」を意味すると捉えるか、「女」から「め」を経由して「妻」に作り直し、対者の男の「妻の妹」と見做すか、のどちらかであろう。そのあたり、【補説】で改めて触れたい。なお、『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・八六八の詞書に「妻のおとうとを持ってはべりける人に、……」と、「妻の妹」を意味する例がある。「すむ」は、妻問い婚の習俗のもとで男が女のもとに通い続けること、を言う。明示されていないその主語は、直前の7番歌詞書劈頭の「ひと」と読む。すなわち、前歌と当歌とは地続きであり、それぞれの詞書の構えに徴して、当歌もまた、噂を「き、て」の清女の詠と見る。●きく比―みぎ前項で触れた事由により、7番歌詞書の「……きくを」の「きく」と同位同列と見る。清女の特定の対者となる／なつた男Ⅱ「ひと」に係る噂の多さとその諸相・段階などが透けて見える恰好である。●くらつかさのつかひ―「くらつかさ」は、内蔵寮。「くられう」とも。律令制で中務省に属した役所で、宮中の宝物、天皇・皇后の装束などを納める倉を管理し、祭祀の奉幣などに当たつた。後の「まつり」との関連で言えば、『親信卿記』天延元年四月十五日条に「葵桂各二折櫃、内蔵寮付内侍所」と見えるのが参考になる。「つかひ」は、その内蔵寮の担い果たすべき役割を体した使者。いわゆる奉幣使である。『うつほ物語』は「祭の使」巻頭に、「殿より祭の使出で立ちたまふ。近衛府の使には中将の君、内蔵寮の使には内蔵頭かけたる行政、馬寮のには式部卿の宮の右馬の君と出で立ちたまふ」とある。●まつりの日―「まつり」は、賀茂祭。葵祭。四月の中の酉の日に行なわれた。●たつ―夙に人名と見做されてきたが、いかが。ひとえに、「……」と、「……」と……」という同種格並立の構文を見出し得ないままに行なわれてきた、完全なる失当と断じてよい解釈である、と観る。「出立する」の意である。●もろともにのりて物みる―「もろとも」は、件の「女のおと、」と一緒に、の意。「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」とて、「……」（『源氏物語』「葵」巻）。「のりて」は、むろん、牛車に、である。「物みる」は、見物する。「賀茂の祭見に出でたりけるを、……」。これは齋宮の物見たまひける車に……」（『伊勢物語』第一〇四段）。●又の日―翌日。『枕草子』第二〇五段には、「祭の還さ、いとをかし」以下、この戌の日の様子が細叙されている。前日からの熱や空気がなお揺曳するなか、清女は「ひと」へと一首を放つのである。その時、そこには、おのずと揶揄や皮肉の気味合いが隠ろう。前歌からの連繫を認めるべき事由が、ここにもある、と言うべきであろう。●いつかた―事物について、どれ。どちら。また、人について、どなた。どの人。●かさし―挿頭。由来、植物の生命力を身につけようとする感染呪術的な信仰から生まれたとされ、神を招き迎え幸福を願う

意味を有していたという。賀茂祭では、縁起物として、葵と桂とを頭髮・衣服・車の簾などに懸けた。『枕草子』は第六三段に、「草は……葵、いとをかし。神代よりして、さる挿頭となりけむ、いみじうめでたし」と見える。後の「あふひ（葵）」の縁語。●
かけかはしたる中のあふひを―「かけ」には、「（思いを）懸ける」と（葵を）掛ける」の両意をきかせるか。「かはす」は、補助動詞的に用いて、「お互いに……する。……し合う」の意。「中」は、【釈文】では仮名に開いた。これも、「中」と「仲」の両意を込めるか。「あふひ」は、右の「かざし」の項でも触れたとおり、賀茂祭の時に用いられ、桂の枝とともに冠の飾りしたり牛車の簾に挿したりした。よって和歌においては、「人もみなかつらかざしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり」（貫之集・巻第二・一三〇）、「行きかへる八十氏人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を」（後撰・巻第四・夏・一六一／よみ人しらず）、「もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん」（後拾遺・巻第十九・雜五・一一〇八／入道前大政大臣）、「年をへてかけしあふひはかはらねど今日のかざしはめぐらしきかな」（詞花・巻第二・夏・五三／大藏卿長房）などと、「かく」「かざす」などの縁語とともに詠まれたり、「逢ふ日」と掛けて詠まれたりした。当歌も同断である。「を」は、詠嘆の終助詞。なお、「……けむ……を」の構造をもつ歌に、たとえば「露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今・巻第十六・哀傷・八六〇／藤原惟幹）などがあるが、「を」はほぼ等しく逆説的な意味を担い、また生成する。

【通釈】

〔あの人が〕妻の妹のもとに足しげく通っているとの噂を聞いていたころ、「内蔵寮の使者として、賀茂祭の日に、出立する」
とも、「女といっしよに牛車に乗って、賀茂の祭見物をしていた」とも耳にして、祭の翌日に（詠んだ歌）、

8 いったい賀茂の神はどちらの挿頭とお決めたのでしようか。あなたが数多の見物客に混じってどなたかと葵を掛けあつていた昨日を、私は思いをかけ合える仲の二人として逢える日だと思っていましたか――。

【補説】

詞書のいかにも不分明な一首である。いま、右の【通釈】は、「女のおと、」の「女」を、「め」を経て「妻」から転訛したものと見て「妻のおと、」に復したうえでの、まさに試解である。その場合の「妻」とは、清女と相逢うことある7番歌詞書の「ひと」
＝男の妻である。

さて、「内蔵寮の使ひにて、祭の日、立つ」とは、その「ひと」すなわち男の正当な事情説明なのか、それとも口実か、「もろと

もに乗りて、物見る」との周囲からの情報は真なのか、それとも偽か、そのあたりの文脈を最もなめらかに、そして生動的に活かしているのは、むしろ「女のおと、」との本文のほうであろう、とも判断されるころである。しかるに、清少納言研究史、ことにその伝の研究史の成果が、その判断をどうやら許さない。清女に「妹は無かつた筈」(『全歌集』二四頁)だからである。

そこで、「女の大殿」との本文をも立て得ること、【語釈】に既に示したとおりであり、その場合でも「女のおと、」の場合と同様の活かし方はできよう。ただし、そもそも「女の大殿」なる表現への不審を、これも前述したとおり、拭いきれないのである。

かくて「妻のおと、」なる本文に拠る場合には、妻―男―清女という、「ひと」をめぐってそれまでに存した三人の関係性の中に、あろうことか「妻の妹」が加わった、いわば新たな男女の構図のなかから、この8番歌という一首は詠み出されたということになるわけである。右の【通釈】は、そのことだけを踏まえた、まさに試訳である。趣意を、あちこちに手を伸ばしているようだが最も思いをかけあえる一人は定め得ているのか、との、清女から「ひと」への迫近にありと観てのそれが、一首の真意にどこまで達しているのか、甚だ心許ない。後考に俟つとともに、斧鉞を乞う所以である。

【本文】

かたらふ人のあさてはかりかならすこんといひし

日もみえす久しくなりておほつかなくなり

ければ御心のつらさにならひにけるなにと

かはといひたる返事に

9 よしさらはつらさは我にならひけりたのめてこぬは誰かをしへし

【釈文】

語らふ人の、「明後日ばかり必ず来ん」と言ひし

日も見えず、久しくなりておほつかなくなり

ければ、「御心のつらさにならひにける。何と

かは」と言ひたる返事に

よしさらばつらさは我にならひけり頼めて来ぬは誰か教へし

【語釈】

●かたらふー(↓7番歌参照) ●はかりー動詞「はか(計)る」の連用形「はかり」から転じて成った副助詞「ばかり」である。上代では大半が「:ほど」というおおよその程度・範囲を表す用法だが、平安時代に入ると確定的な表現が増え、特に年齢や年月・日数、長さや広さ、量などの数詞に付く例、また、「九月ばかり」「夜半ばかり」など時日に付く例が多くなるという。ここもそれで、曖昧さの含みを残しつつも、一応ピンポイントでその日(まで)には、というニュアンスであろう。●こんー「く(来)」は、話し手を中心と考える所へと、空間的、時間的、心理的に近づくことを、話し手の立場で表現する語。よって、現実の動作としては話し手が行く場合でも、目的地を中心と考えているときは、その場所へと行く動作が「く(来)」と表現される。「かの女、:『:』』と言ひて見出だすに、からうじて、大和人、『来む』と言へり。」(伊勢物語「第三段」) ●おほつかなくなりにければー「おほつかなし」は、対象がはつきりとは認識できない状態をいう語。そこから、そのために不安である、気がかりである、の意に転じた。●つらさー相手の仕打ちや自らの置かれた状況に耐えながら、非情だ、冷たいと感じるさまを表す形容詞「つらし」から派生した名詞。冷淡さ。薄情さ。耐えがたさ。「:(源氏)『:。世に知らぬ御心のつらさもあはれも浅からぬ夜の思ひ出ではさまざまめづらかなるべきためしかな』とて、:」(源氏物語「帚木」卷) ●ならひにけるー「ならふ」は、「慣」ないし「馴」をあて、「なれる。なじむ」の意、「倣」をあてて「まねる」の意、さらには、「習」をあて「学ぶ」の意。つづく一首において「をし(教)ふ」と対置している言語状況、そもそも詞書が歌の屹立する回路を形成しているはずであるという大前提に鑑みれば、「習ふ」と捉えるべきだろう。「にける」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形に過去の助動詞「けり」の連体形が接続したもの。いわゆる連体止めである。「人」の、韜晦を含む我意を反映する。●なにとかはー「何とかは見る」、「何とかは思ふ」といった意味合いで、相手に向けて、事態の承認・承諾や何らかの回答を迫るばあいの口吻を表わす。●よしさらばー不本意ながら相手の言い分や既定の事実を認め、そこから新たに行動を起こそうとする気概や心性を伝える表現。まあよい、それならば。しかたない、それならば。和歌では、たとえば『後拾遺』に「よしさらば待たれぬ身をばおきながら月見ぬ君が名こそをしけれ」(巻第十五・雑一・八六五/藤原隆方朝臣) ●たのめてー「たのむ」は四段で「頼りにする。あてにする。信頼する」、下二段で「頼みにさせる。あてにさせる。期待させる」の意。ここでの「たのめ」は、むしろ、後者の連用形。●誰かをしへしー「をしへ」は、「をし(教)ふ」の連用形。

結尾の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。上の「か」と結んで疑問の構文を形成している。誰が…したか、の意。「をしふ」は、前述のとおり、「学ぶ」の意の「なら(習)ふ」との対を成して、「教える。身につけさせる。告げ知らせる」の意。

【通釈】

親しくしている男ひとが、「明後日には必ず行くよ」と言ったその日も姿を現さず、何日も経って不安になったとみえて、「あなたつれなさに学びましたよ。どうです、いかにもでしょ」と言っつてよこしたその返事として(詠んだ歌)、

9 ええ、それならばそれでかまいません、あなたのそのつれなさは私に習ったということなのでしょう。では、お訊ねしますが、あてにさせておいて来ないというのは、いったいどなたが教えたのかしら。

【補説】

知られるとおり、本歌は、『後十五番歌合』『玄玄集』『金葉集(三奏本)』『詞花集』といった諸書に収載されている。その事実がそのまま本歌の名歌たることを示し証していると言っつてよいだろう。「名歌」に押し上げた核忠は、言うまでもなく、一首から直ちに感知される、言葉の取りなしの軽妙さと舌鋒の鋭さとの併存、言い換えれば、清女の情意と才知とをもって男へと放たれた、清冽なる残酷さの厳存であろう。

ところで、異本は本歌をその巻軸に据えている。そこで想起されるのが『伊勢集』である。仕えた中宮温子の崩御に遭って詠まれた伊勢の絶唱「よりあはせて泣くらん声を糸にしてわが涙をば玉にぬかなむ」、他本が同集巻頭の「伊勢日記」と俗に称される部分閉じめに位置せしめているそれを、西本願寺本はまさに一巻の掉尾に配していた。一篇の私家集を閉じるに、いずれの一首を用いるか。いずれの歌が一篇を結ぶのに相応しいか。想像されるのは、存外、詠った本人ではなくて、むしろ歌人誰彼への憧れや敬いからその歌人のアンソロジーを編みたくて編みはじめた第三者の、言うなれば撰歌意識の介入である。その意識が「名歌」を求め、引き寄せてくるのはいかにも自然な成りゆきであろう。

かくて西本願寺本『伊勢集』なり異本『清少納言集』なりにそうした撰歌意識の介入を認め得るとしたときに、翻って本流布本における当歌のあてがわれた位置の、いかにものさり気なさ、そこにはまたあるとすれば別様の撰集意識が、しかも清女本人のそれが遺のこっている可能性を示唆しているようにも思われるのである。

【本文】

宮のあまた殿におはします比さねかたの
中将まいり給ておほかたに物などのたま
ふにさしよりてわすれたまひにけりなといへとい
らへもせてたちけるすなはちいひをくり
たまへる

10 わすれすやまたわすれすよかはらやの下たく煙下むせびつ、

【釈文】

宮の粟田殿におはしますころ、実方の

中将参りたまひて、おほかたにもものたま

ふに、さし寄りて、「忘れたまひにけりな」と言へど、答い

へもせて立ちにけるすなはち、言ひ送り

たまへる

忘れずやまた忘れずかはらや瓦屋の下た焚く煙下むせびつ

【語釈】

●宮—中宮定子。●あまた殿—「あまた」を一語の副詞と見る方途は、文意通じがたく、放棄するほかあるまい。今は、「ま（満）」を「は（波）」の誤写とみる『全歌集』に従い、「あまた」は「あはた」が本来であったとしておく。果たして「粟田殿」は、これも『全歌集』がその蓋然性を示した、正暦五年（九九四）二月初旬に積善寺供養のために定子が滞在した、東三条院は東側の二条北院の仮初の呼称、とするに如くはあるまいか。あるいは、中宮の父道隆の山莊（歌人抄）とすべきか。ちなみに、正暦五年のこととすれば、初出仕が正暦四年の暮であったとされる清女にとっては、いずれにせよ、それから間もない頃のこととなる。●さねかたの中将—「さねかた」は、藤原実方。生年は不詳。藤原北家師尹の孫。定時の男。その定時の早逝によってか、済時の養子に。正暦二年（九九二）春、任右近衛中将。長徳元年（九九五）正月、陸奥守に任じられ九月に赴任、同四年十二月、同地にて没

した。中古三十六歌仙の一人。『拾遺集』以下の勅撰集に六十七首入集。●おほかたに―形容動詞「おほかたなり」の連用形。とおりいっぺんに。ひととおり。ふつうに。●さしよりて―「さし」は接頭語。「さしよる」で、近づく、近寄る、の意。●わすれたまひにけりな―「にけり」は既出(8番歌参照)。「な」は、いわゆる念押し終助詞。相手に呼びかけ、自分の気持ちを訴える語感がある。なお、この発言は、「いへと」すなわち「言へど」と、無敬語表現で承けられているのに徴して、清女のものである。よって、「さしよ」ったのもまた、彼女である。●いらへもせて―「いらへ」は、動詞「いらふ」の連用形からのいわゆる転成名詞である。返事。応答。なお、「いらふ」の類義語「こたふ」が、問いかけにまともに答える意であるのに対し、「いらふ」は、適当にあしらって、いちおう返事をする意、という。「も」は係助詞。ここでは強意・強調の働き。「せ」は、サ変動詞「す」の未然形。「て」は、いわゆる打消。接続の接続助詞「で」。総じて、何の返事もせずに、の意。「いとづかしと思ひていらへもせて」たるを」(『伊勢物語』第六二段)。●たちにつけるすなはち―「たつ」には、言うまでもなく種々の意味があるが、ここでは「その場を後にする。立ち去る」の意。「すなはち」は、元来、即時・即刻の意の名詞だが、意味の上から、ただちに、の意の副詞となった。…するとすぐに。…するや否や。…するかしないかの間もなく。「…幼き人を呼び出でて、『…』など言ひおきて、出でにけるすなはち、はひ入りて、…」(『蜻蛉日記』上巻/康保三年八月)。「…人のもの言ふ聞きなどするすなはち、帰り来て…」(『枕草子』第七七段)。●いひをくり―「をくり」は、歴史的仮名遣いに従えば「おくり」。「言ひ送る」で、手紙や伝言などで意思を言い伝えること。言いやること。●わすれすや―異本は「わすれすよ」に作るが、当流布本文のままに従う。【釈文】のとおり、「忘れずや」の謂いである。「や」は、不確かなことを相手に問う意を表わす、(疑問)の係助詞の文末用法ないし終助詞とも、詠嘆や呼びかけを表わす終助詞ないし間投助詞とも、いずれも把握は可。前者に抛れば、「忘れてはいなかったのですか」、後者に従えば、「忘れてはいなかったのですね」、の意。今は、つづく第二句の「またわすれすよ」との呼吸から、後者と判断する。●またわすれすよ―「また」は、対等・同格の事柄を並べる用法としての接続詞。こちらもまた、のニュアンス。「わすれすよ」は、【釈文】のとおり、「忘れずよ」。「よ」は、先の「や」と並列に構えられた間投助詞。呼びかけ・念押しや強調など、相手に注目させてきわだたせたり、知らせたりする意を表わす。「私もまた忘れてはいませんとも」といった意になろう。●かはらやの―「かはらや」は、瓦屋。瓦舎。和名抄に「窯質波良夜焼レ瓦竈也」とあるのに抛れば、瓦を焼く竈だが、歌の実例に即せば、その竈のある建物、小屋と見られなくもないか。いづれにせよ、煙がこもるもの・場であるゆえに、「むせぶ」「煙」などの縁語として恋歌に詠まれることが多

い。「わが心かはらむものかかはらやの下たくけぶりわきかへりつつ」(『長能集』二九。後拾遺・卷第十四・恋四・八二八／長能)。●下たく煙——「下たく」の「たく」には、一般に「焚」を当てる。火が上に燃え上がらないで、下でくすぶっている、の意。表に現れないで心の底でものを思うこと、恋の思いに秘かに胸をこがしていること、などに譬えていう。「一煙」は、まさにそのまま、そのように、下でくすぶっている煙。●下むせひつ、——「むせひ」は「むせび」。「咽」を当てる。元来は、たとえば水が、川の下部に、特有の音を立てて底流するの意、あるいは煙が竈や小屋の下部に底流し、こもりつつづけるの意か。そこから、そうした忍び音を立てる水のよう、あるいは底流してこもる煙のように、人目を忍んで泣く、あるいは人知れず心の中で咽ぶ、そのような人のさまを譬えて言う表現として用いられるようになったか。ともあれ、「下むせぶ」とは、声を忍ばせて咽び泣く、人知れず声をつまらせて泣く、の意である。「つ、」は、反復の意を表わす。同時並行ではない。…ては、また…て。何度も…て。

【通釈】

中宮が粟田殿にお住まいであったころ、実方の中将が参上なさって、とおりにいっぺんに挨拶などなさるので、(簾のもとに)近寄って、「私のこと、もうお忘れになったのですね」と囁いたのに、返事もしないで立ち去った、と思った途端、送っておよこしになった(歌)、

10 お忘れではなかったのですね。私もまた忘れてはいませんでしたよ。瓦屋で焚く煙がこもりつつづけるように、心の中で何度も咽んではまた咽びして——。

【補説】

清女と実方との関係が、たとえば次のような諸書によって確認し得ること、知られるとおりである。

『拾遺和歌集』卷第十四・恋四・八五〇

元輔が婿になりて朝に

藤原実方朝臣

時の間も心は空になるものをいかで過ぐしし昔なるらむ

『後拾遺和歌集』卷第十二・恋二・七〇七

清少納言、人には知らせで絶えぬ中にて侍りけるに、久し

うおとづれ侍らざりければ、よそくにて物など言ひ侍けり、

女さし寄りて、忘れにけりなど言ひ侍ければよめる

(藤原実方朝臣)

忘れずよまた忘れずよ瓦屋のしたたくけぶり下むせびつ、

『実方集』一八一・一八二

元輔がむすめの、中宮にさぶらふを、おほかたにていと

なつかしう語らひて、人には知らせず絶えぬ仲にてある

を、いかなるにか、久しうおとづれぬを、おほぞうにて

ものなどいふに、女さしよりて、「忘れ給ひにけるよ」

といふ。いらへはせで、立ちにけり、すなはち

忘れずよまた忘れずよかはらやの下焚く煙したむせびつつ

返し

清少納言

葦屋の下焚く煙つれなくて絶えざりけるもなによりてそ

右のうち、たとえば『拾遺集』の異本が全く別の作者を伝えている事実をもつてしても、二人の関係が無であったことの証明にはならぬであろう。【語釈】の項でも少しく述べたとおり、清女が定子の許に出仕した正暦四年(九九三)冬以降、実方が陸奥に下向することになる長徳元年(九九五)九月までの間に、「久しうおとづれぬ」時間をも抱えながら、短時日のうちに燃えさかるような恋の時を経たと見て、おそらく間違いはなく、同時にまた、何らかの事情によって秘匿しておかねばならぬ側面を持つ関係ないし恋愛であったことも動かぬであろう。

そうした状況下の、いずれかの時点で詠出された当歌が、見られるとおり、『後拾遺』や『実方集』の伝える「忘れずよ」の畳みかけではなく「忘れずや」の初句を披瀝している一点は、それ相応に貴重であるとは言えまいか。

「忘れずよ」の畳みかけが内包する、あるいはそこから滲む、実方の焦りの色もさりながら、「忘れずや」と清女に擦り寄りぬわけにはゆかぬいじらしさもまた、それはそれで、実方側にこそ何らかの事情があったろうことを裏打ちし、一方では詞書の伝える状況、すなわち無視したかに見せてその場での接触を回避しておいて、即きびすを返して詠歌に及ばずにはいらなかった、実方のそうした位境なり心意なりに見合うものと観じられるのである。

【本文】

返し

11 しつのをは下たく煙つれなくてたえさりけるもなに、よりそも

【釈文】

返し

賤しづの男をは下た焚けく煙けつれなくて絶えざりけるも何によりそも

【語釈】

●しつのを―賤の男。(貴族から見ても)身分の低い男。「賤の男がしばかりみだる鳥屋とやの野にけさぞ霞はたなびきにける」(『堀河院百首』春部・三八)、「賤の男のそとにもたつるかやり火の下にこがれてよをやすぐさん」(同上・夏部・四九五)など、歌々によって、その指し示す具体は農夫・木樵・炭焼など、区々である。ここでは、実方の贈歌に用いられた「瓦屋かはらや」を承けていると見れば、瓦焼きに従事する男、ということになる。●つれなくて―「つれなし」は、「連無し」で、関係がないさま、関わりないさまをいうのが原義。他から影響されないさまを客観的にいう語。平然としている。そしらぬ顔だ。「∴、いささか、何とも思ひたらず、つれなきも、いとねたきを。」(『枕草子』第七七段)。ただし恋の文脈においては、多く、働きかけて無視された側の不満や恨みの情をいうのに用いられる。冷淡だ。薄情だ。ここでは、たとえば「潮しほたるるわが身のかたはつれなくて異浦ことうらにこそけぶり立ちけれ」(後拾遺・卷第十一・恋一・六二六/道命法師)のそれと同断に、掛詞として両意を表わすべく位置している。●たえさりけるも―「たえ」は、「絶ゆ」の未然形。「煙」の縁語。「さり」は、打消の助動詞「ず」の連用形「ざり」。「も」は、強意の係助詞。●そも―平安時代には既に「ぞも」であったとも。終助詞(係助詞とも)の「そ」+終助詞「も」で、文末ないし歌末にあつて、疑問の語を上に伴い、詠嘆を込めた疑問の意を表わす。(いったい)∴なのかなあ。「何事もこたへぬことならひにし人としるしるとふや誰たれぞも」(『公任集』五四二)、「まがねだにとくといふなる五月雨になにのいはきのなれる君きみぞも」(『能因集』三三)。

【通釈】

返歌

11 瓦焼夫は小屋に立ちこめる煙にも平然としていて、くすぶる火が絶えることはなかったようですが、さて、あなたがこれだけ私

につれなくしておいて、それでいて心のなかの思いの火が消えることがなかったというのは、いったいどなたの存在によってなのかしら。

【補説】

よく知られたやりとりでありながら、殊にこの清女の返歌は十分な解を与えられてはこなかったのではあるまいか。「賤の男が瓦を焼く小屋では立ち込める煙はさり気ない様子ながら、いつも絶えなかつたのは何のためでしょう。私とて心中の思いを表に出さずずっと思いを燃してきたのは、どなたのせいでしょう」（『歌人抄』）、「下で燃えている煙が、表面には（燃えているとも）見えなくて、消えてしまわないというのもの（いったい）何がそうさせるのでしょうか。」（新日本古典文学大系『平安私家集』）、「瓦焼く、葦葺き小屋の煙のように、そ知らぬ様子で立ち（上り）、それで「忘れていない」だなんて、一体どうして言えるのかしら。」（『歌人選』）、「そんなにくすぶる思いなら、もうこれまでとも思うのに、なぜか縁が切れないのは何なの」（馬場あき子『日本の恋の歌恋する黒髪』）と、いずれも隔靴搔痒の憾みが遺る、せっかくの贈答が贈答になりきらぬ理解にとどまってしまっている。

咽び泣くほどの思いを抱きつづけてきたとおっしゃるけれど、どこのどなたに向けていらしたのかしら——答歌は、そう切り返していたのである。それはまた、9番歌と同断の詠み口を有するという意味において、私たちがそこに連繋の糸の存在を認め得るばあいの証左である、とも言えようが、いずれにせよ実方と清女とは、ストレートに思いを寄せる（男）の歌と、はぐらかし切り返す（女）の歌という、典型的な贈答歌を詠み合う関係にあったということ、その形姿の点綴をかく流布本が有しているということに、改めて注意しておきたいと思う。

翻って『枕草子』は、第三二段（小白川といふ所は）の段・第八五段（宮の、五節いださせたまふに）の段）に、いずれもいわば好意的に「実方」を描いてはいるものの、二人の関係には、金輪際、触れるところがなかった。加うるに、『枕草子』は三巻本において、跋文を除けばその掉尾、第二九八段を、

「まことにや、やがては下る」といひたる人に、

思ひだにかからぬ山のさせもぐさ誰かいぶきのさとは告げしぞ

と、かの「かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」なる実方詠を十分に彷彿とさせながら、ついに、背景にあったはずの実情や具体を、言い得べくんば秘匿しおおせて閉じていた。

その意味で、流布本『清少納言集』は、みぎ章段のいわば前夜までの実方との私的関係を、むしろ、かゝと、刻みつけることをこそ
附託された面持ちを呈しているのだと読み得ることを、1 番歌の【補説】にひきつづき、ここで改めて陳べておきたいのである。

さて、ならばその託されたところの実践・実行は、奈辺でいかように為されていくのか、いよいよ注視していかねばならないよ
うである。

【本文】

人ゆいまへにやまと人なんゆくといひたるに

12 こ、なからほどふるたにもある物をいと、とをちの里なきかせそ

【釈文】

人、「維摩会に、大和へなん行く」と言ひたるに、

ここのながらほどふるたにもあるものをいとどとをちの里な聞かせそ

【語釈】

●ゆいまへ―「へ」は歴史的仮名遣いに拠れば「ゑ」。維摩会。『維摩経』について講義と問答を行う法会。興福寺講堂でのそれが
著名で、特に平安朝には最も権威のある法会であった。十月十日から藤原鎌足の忌日である十六日まで行われるのが恒例。興福寺
は大和国、現在の奈良県は奈良市登大路町にある寺。なお、平安遷都までの寺名は厩坂寺で、同国高市郡厩坂（現在の奈良市橿原
市）にあった。●やまと人―「人」は、上の「と」からの運筆で、ほんらい「へ」であったものがある段階で見誤られて「人」と
書写され来たった、と見て、【釈文】では「へ」と改めた。「やまと」は、今の奈良県の旧国名。大和国。●こ、なから―代名詞「こ
こ」と接続助詞「ながら」とから成る連語。ここにいる状態のまま。ここにいなながら。散文にしばしば見受ける表現だが、和歌
ではたとえば外ならぬ『実方集』に、「ここのながら袖ぞつゆけき草枕とをちの里の旅寝とおもへば」（二五七）と詠まれている。●
ほとふるたにも―「ほと」は、名詞「程」。ゆらい、経過してゆく時間の意。一定の時間歩くことから距離・広さを表す意に、時
間の推移に伴って物事が変化することから人間の年齢や身分、物事の程度・状態を表す意にと、広汎に用いられるようになった。
ここでは、下接する「ふる」が、動詞「経ふ」の連体形「経る」と地名「布留」との重層する文脈を生成することと相俟って、時間

と空間との両意を交叉させる。「ふる」は上述のとおり、「経る」に「布留」を響かせる表現。布留は、大和国の歌枕。現在の奈良県天理市布留町・石上町の地域。「たにも」は、副助詞「だに」＋係助詞「も」。ここでは、「…さえも」の意。●あるものを―「ものを」は、形式名詞「もの」に間投助詞ないし接続助詞「を」が付いて一語化した接続助詞。ここは逆接の確定条件を表す。…のに。…けれども。●いと、―いとど。「いと」と「変化した語。甚だしさがいつそう増す意を表す。「ただでさえ…なのに」そのうえ」の意。●とをちの里―一般に「十市」の漢字を当て、大和国の歌枕。現在の奈良県橿原市十市町付近を中心とする地域。和歌では、「トオ」の音から「遠し」を引き寄せ、遠路ないし遠地を掛けて詠むのが一般的。「暮ればとく行きて語らむあふことのとをちの里の住み憂かりしも」(拾遺・巻第十八・雑・一九七)や前掲の『実方集』の「ここながら…」など、逢うまでの間遠や逢い難い遠さといった意に掛ける修辭次元のものが多し。●なきかせそ―「な」は副詞。下の終助詞「そ」と呼応しての「な…そ」は、言うまでもなく禁止を表す。…しないでくれ。「きかせ」は、「聞かせる」の意の動詞「聞かす」(下二段活用)の連用形。

【通釈】

あの人、「維摩会に、大和へ行くことになった」と言ってきたので(詠んだ歌)、

- 12 ここ、同じ都にいなながら、あなたがいるところは布留なのではとさえ思えるくらいに逢ってもらえない時間がただただ経過していたのに、その上さらに遠い十市の里に行くなんて、けっして言わないでください。

【補説】

詞書の「人」について、『歌人抄』は、「これも則光が相手と思われる」としているが、いかがであろうか。やはり、気になるのは、『語釈』の項でも触れた、『実方集』に「ここながら袖ぞつゆけき草枕とをちの里の旅寝とおもへば」と詠まれた一首(二五七)の存在である。その、初句を同じうし、「とをちの里」をとともも有するありようは、いかにも無縁ならざるものを感じさせはしまいか。10番歌からの繋脈の糸を、なおあるものと見てもよいのではあるまいか。

【本文】

くらまにまふて、かへりて

- 13 恋しさにまたよをこめて出ぬればたつねそきつるくらま山より

【釈文】

鞍馬に詣でて、帰りて、

恋しさにまだ夜をこめて出でぬれば尋ねぞ来つるくらま山より

【語釈】

●くらま―山城国の地名。「鞍馬寺」もしくは「鞍馬山」の略。ここは、次に「まふて、」とあることから、前者。鞍馬山にある天台宗の寺。平安京の北方鎮護の寺であった。●まふて、―「まふて」は、歴史的仮名遣いに従えば、「まうて」とあるべきところ。「まうつ」は、もとより「まゐいつ」の変化した「まゐつ」がウ音便化したものである。注するまでもなく、神社・寺などに参詣する、の意である。●かへりて―「かへり」は、都に戻り、の意。むしろ、問われるのはその主体であるうが、7番歌や8番歌の詞書にも見られるとおり、詠歌直前の〈動詞の連用形＋「て」〉は、本集においては清女を指し示すと見るべきであろう。【補説】で改めて触れたい。●恋しさに―「恋しさ」は、眼前に存在しない人や事物、また遙かな場所や過ぎ去った昔に心惹かれる思い、特に手の届かない異性に惹かれて逢いたいと切望する思いを表す形容詞「恋し」から派生した名詞。たとえば、『和泉式部日記』中の帥宮の一首に「すぐすをも忘れやするとほど経ればいと恋しさに今日はまけなむ」、『堀河院百首』に「恋しさにしのびしかどもはるばると旅の空までたづね来にけり」(恋・一二三〇／師頼)など。●またよをこめて―「よをこむ」は、しばしば当歌のように「よをこめて」の形で用いて、まだ夜が明けず、夜明けまでに時間がある間に…する、の意を表す。言わずと知れた清女の一首に、「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよにあふ坂の関はゆるさじ」(『枕草子』第一二九段。また、第二句を「鳥のそら音に」として、後拾遺・卷第十六・雑二・九三九)がある。なお、「また」は、副詞の「まだ」。「竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだ夜をこめておきにけるかな」(『実方集』一一六。詞花・卷第八・恋下・二三七／実方朝臣)。●たつねそきつる―「たつね」は、「尋ぬ」の連用形。「尋ぬ」は、ある道筋の先にいるであろう人や物を思い、その道筋を手がかりに、先へ先へと進んでいくのが原義という。ここでは、朝まだき遙か手前の夜の闇で不明の中を、ここかと道筋をつけながら、逢いたい人の居場所へとたどろうとするのである。「そ」は、係助詞の「ぞ」。「ぞ―つる」で係り結び。理路のうえではここで句切れ、次の「くらま山より」とは倒置の関係を形成する。●くらま山より―「くらま」には、「暗(し)」と「鞍馬」とが掛かる。

【通釈】

鞍馬に詣でて、帰って（詠んだ歌）、

13 あなたのことが恋しくてまだ夜が明けないうちに立出したので、暗い鞍馬山から道を求めたどりながら帰って参りましたよ。

【補説】

異本の形姿「恋しさにまだ夜をこめて出でたれば尋ねぞ来たる鞍馬山まで」に対し、見られるとおりの当歌は、夙に詠歌主体が疑問視され、果たして『枕草子』第七八段「かへる年の二月廿余日」の条に見える頭中将は斉信の、詣でた鞍馬から取って返して清女への面会を求めたとの一件をこれに聯絡させ、詠者を当の斉信に比定するという手続きが取られてきたのであった。

さて、しかし、【語釈】の項でも触れたとおり、「かへりて」なる表現の論理が、その主体を、断じて清女以外に指向することがないとすればどうか。別言して、たとえば5番歌の「おこせたる」や12番歌の「いひたるに」のような表現の悉皆存さぬところに、清女以外の主体を据えることが、本集の詞書における論理に徴して不可能であるとすればどうか。私たちは諦観をもって斉信詠者説を手放すほかないのが道理であるとすべきではなかったか。

かくて、清女は鞍馬に詣で、鞍馬から帰ることがあったのである。少なくとも、あったと読むべきである。ここに、和泉式部の場合を引き合いに出しても、場違いにはあたるまい。

宮の訪れないつれづれを慰めんと石山寺に詣でた『和泉式部日記』の「女」。宮は見捨てられた思いとなつて、ゆえにこそ心は改めて昂まり、二度も文を遣る。いっそ訪うてみようかとも思うものの、身分から、果たせるはずもない。さて――、かかるほどに出でにけり。「さそひみよとありしを。いそぎ出でたまひにければなむ、

あさましや法の山路に入りさして都の方へたれさそひけむ」

御返り、ただかくなむ、

山を出でて暗き道にぞたどり来し今ひとたびのあふことにより

見られるとおり、「女」は、宮への一途な思いとともに山を下りたのである。その一首に用いられた「暗き道」なる表現は、『法華経』は化城喻品において「現世」を譬えているのに拠つたものであるけれども、それが「女」の下りた、現実的物理的な「暗夜の行路」をも兼ねて指し示していると思えば、清女の一首は、まさにこれと類同であろう。強いて言えば、「たづね来」と「たどり来」とで、『和泉式部日記』の「女」の経た道のほうが、その不明の度合いにおいてやや勝るといふ違いがある程度である。

または、『後撰和歌集』に、「鞍馬の坂を夜越ゆとて詠みはべりける」との詞書を前置して収められた亭子院の今あこの、「昔より鞍馬の山といひけるは我がごと人も夜や越えけん」(巻第十六・雑二・一一四〇)との一首が示唆するとおり、鞍馬を暗い時間帯に往来すると詠むのはいわば類型の踏襲であつて、清女もそうした表現を襲いつつ、実は一途な「恋しさ」を詠みおさせたものと定位すべくでもあろうか。もしそのような把捉・理解が成り立つとすれば、現実問題として女性が夜を押し旅をすることがあつたかとの懐疑については、議論の埒外に置かれることにならう。

いずれにもせよ、4番歌「我なからわか心をはしらすして又はあはしといひてける哉」でも見たとおり、時に直情をそのままに詠うところあるのが清女である、それは心にとめてよいことであらう。

【本文】

住吉にまうて、いととくかへりてきなんその程

ゆめわすれたまふなといひたるに

14 いつかたにしけりまさるとわすれ草住吉の、になからへてみよ

【釈文】

「住吉に詣でて、いととく帰りて来なん。そのほど、

ゆめ忘れたまふな」と言ひたるに、

いづ方に茂りまさると忘れ草すみよしの野にながらへて見よ

【語釈】

●住吉―摂津国の郡名。歌枕。「住吉」と表記して、古くはスミノエと訓んだが、平安初期に新たにスミノシの訓みが生じた。住吉神社が鎮座し、海上の守護神として信仰され、また風光明媚な地でもあったので歌にも多く詠まれ、「住み良し」と掛けて詠うことが多い。ここは、次に「まうて、」とあることから、住吉神社を指す。●いととくかへりてきなん―「とく」は、「疾し」の連用形。早く。「なん」の「な」は、強意の助動詞「ぬ」の未然形。「ん」は、意志の助動詞の終止形。総じて、「ほんとに、すぐのすぐ、帰ってくるよ」、の意。●その程―「程」は、経過する時間をいう。その間かみ。(男が)住吉に詣でて清女のもとに帰り来る

までの間。●ゆめわすれたまふな―「ゆめ」は副詞。あとの「な」（禁止の終助詞）と呼応して、「決して…するな」の意。●いひたるに―12番歌の詞書結尾と同位。よって、こども、「住吉に…」から「…わすれたまふな」まで、「人」が言つてよこした、ということになる。●いつかたに―「いつ」は「いづこ（何処）」や「いづれ（何れ）」などの「いづ」と同相、「かた」は「方」で、もともとは不定の方角を表し、そこから不定の場所や物事、人物をも指すようになった。●しけりまさると―「しけりまさる」は、「茂り増さる」。草木がより繁茂すること、草などがますます生い茂ること。「秋くれば草木かるれど我が宿はしげりまされる人しとはねば」（『新撰万葉集』三九六）と詠まれたり、「はかなしやただかりそめの世の中に我が恋草のしげりまさるよ」（『撰政左大臣家歌合』一五）などと、ある心情（この引例では、恋心）が募ることの譬えとして用いられたりした。●わすれ草―『和名抄』に「萱草。一名、忘憂。和名、和須礼久佐」と見える。平安時代には、「忘れ草種とらましを逢ふことのいとかくかたきもの知りせば」（古今・巻第十五・恋五・七六五／よみ人しらず）、「道知らば摘みにもゆかむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草」（同右・墨滅歌／貫之）などと、恋の憂いや苦しみを忘れさせてくれる草として用いられたことが知られるが、それよりもむしろ、「住吉と海人は告ぐともながるすな人忘れ草おふというなり」（古今・巻第十七・雑歌上・九一七／忠岑）、「忘れ草名をもゆゆしみかりにても生ふてふ宿はゆきてだにみじ」（後撰・巻第十四・恋六・一〇五〇／よみ人しらず）などと、「人忘れ草」すなわち恋人のことを忘れてしまふ草として詠まれることのほうが一般的であつた。●住吉の、に―前記したとおり、「住吉」には「住み良し」が掛かる。よつて、【釈文】では「すみよし」と仮名に開いた。「、」は、「野」。「わすれ草」との縁で「野」と詠まれたと考えられるが、これが「里」ではないことに、なお留意したい。すなわち、元来は「里」こそが「住み」得る空間であり、「野」はせいぜい「泊まる」とどまるそれであつた。しかるに、であればこそ、「人」にとつては土地の女性と情を交わし得るといふ意味で「住み良」き所と成し得る、そういう逆説の成り立つ空間であり、表現でもあるのが「野」であつた。清女はそのことを知悉して、「すみよしの野」と詠んだのである。●なからへてみよ―「なからへ」は「ながらふ」の連用形。「ながらふ」は、元来、「流る」に反復・継続の「ふ」のついた語で、「流れつづける」の意。その空間的用法から、「物事が長いあいだ継続・持続する意が派生した。当歌においては、居つづける、長逗留する、の意である。なお、「なからへて」には、摂津国の歌枕「長柄」が響く。「みよ」は、「みる」の命令形。注意したいのは、直前を承けて「居つづけてみなさい」という文脈の形成に与るわけではない、ということである。承けているのは、初二句結尾の「と」である。どちらに忘れ草はたくさん生えているか（「どどちらがより忘れるか」と、（見て）判断しなさい、

と結んだのである。

【通釈】

「住吉大社に詣でて、ほんとにすぐ戻って、君のところに行くよ。だから、その間、ぜったい僕のこと、忘れないでよ」と言っただけなので（詠んだ歌）、

- 14 あなたと私、どちらが忘れっぽいと出るか、忘れ草の茂る住吉―私のことなんかすっかり忘れて、別の女の所での住み心地のほうがいいとあなたが思うに決まっている住吉―の野にどうぞ長逗留でもして、あなたの忘れぶりにさながら通じるその草の、いかにもの生い茂りぶりを、自分でよくご覧になってくださいな。

【補説】

前歌と詞書起筆の型を同じうする。連繋は、しかし、その程度に留まるものではない。

12 番歌の「とをちの里」、13 番歌の「くらま山」、そして本 14 番歌の「すみよしの野」。「里」といい「山」といい、また「野」といい、いずれも古来、人間がなんらか関わりつづけてきた空間である。それが、かく連続して並ぶ。そればかりではない。それぞれに冠された「とをちの」、「くらま」、「すみよしの」、いずれにも、それぞれに「遠し」、「暗し」、「住み良し」が掛かるといふ、そういう端然たる連繋の相を見せながら、「人」に向けて詠み放たれた三首は並置しているのである。やはり、本集における連繋は見落とされてはなるまいし、また、侮るべきでもないようである。

【本文】

いくとせもゆめくわすれたまふなといひをきて
よつきといふにかへりてくれ竹につけておこせ
たれは

- 15 わするなよくといひしはくれ竹のふしをへたつる数にそ有ける

【釈文】

「幾年もゆめゆめ忘れたまふな」と言ひ置きて、

四月といふに帰りて、呉竹につけておこせれば、

忘るなよと言ひしは呉竹の節を隔つる数にぞありける

【語釈】

●いくとせも―「いくとせ」は「幾歳」。何年先までも。ずっと。●ゆめくわすれたまふな―14番歌詞書に既出の「ゆめわすれたまふな」の「ゆめ」を重ねて禁止の意を強めた表現。●いひをきて―歴史的仮名遣いに従えば「いひおきて」。「いひおく」は、言い残す、立ち去る際などに話しておく、の意。●よつきといふに―「よつき」は「四月」。四か月。「いふ」は連体形で、準体言。「に」は格助詞で、ここでは時間を表す。総じて、四か月という時に、の意。●くれ竹につけて―「くれ竹」は、中国からもたらされた竹、の意。ちなみに、竹に節があること、また竹の節と節との間を「よ」ということから、和歌では、「呉竹(くれたけ)」の形で、「世」や「夜」、あるいは「うきふし」や「ふし」に掛かる枕詞として用いられる。なお、同様の用い方をする表現に「なよ竹」があるが、若竹のなよなよとした、また柔らかにしなう性質をあらわす「なよ」と「呉竹」とが結び合わさったものである。「つけて」の「つけ」は、「とりつける。ある物に添える」といった意の「付く」の連用形だが、実態に即していえば、竹を文付枝にして、文を竹に結んで、ということである。●おこせれば―5番歌の詞書にあった「おこせたる」が、そのまま次に位置する歌が「人」のそれを指し示していたのに対し、これは逆に、次なる一首が清女のものであることを前書きする体である。●わするなよ―「な」は、前歌・当歌詞書に既出の、禁止の終助詞、「よ」は、いわゆる念押しの間投助詞(二説に、終助詞)である。●くといひしは―「く」の重畳範囲が不分明である。歌意からすれば、初句「わするなよ」全体とみるほうが滑らかではあろうが、いかにも字余りが過ぎ、「なよ」のみとみれば、音数律は調うけれども、歌意は十全には至らぬ憾みが遺る、というわけに、わかには判じ難い。当面は韻律の整調を優先して、男の言い置いていった「わするなよ」という言葉の、その「なよ」という言葉を突いたものと捉えておきたい。ともあれ、「なよ」が「くれ竹」を導く恰好である。●ふしをへたつる数―「ふし」は、「節」。竹の空洞の筒を区切る、こぶのようにふくらんだ部分。「へたつる」は、「へたつ」の連体形。「へたつ」は「隔つ」。二つのもの中間に境目を置くこと。引き離すこと。かの『竹取物語』の「節をへだててよごと」に黄金ある竹を…から明らかに知られるとおり、竹の節と節とを分け隔てるのは「よ」であり、ここで「ふしをへたつる数」というのは、その「よ」の音ヨを経て現出する数字「四」である。果たして、詞書の「よつき」と繋がる。翻って「ふし」には、男が女(清女)へのおとないを果たさ

ず、その仲を遠ざけた「時間」の意が掛かっている、と見られよう。●有ける―「ける」は、「有ける」の直前の「そ」、すなわち係助詞「ぞ」の結びで、連体形。いわゆる発見・気づきの「けり」である。なお、結句を同じうする歌に、「荒磯海の浜のまさごと頼めしは忘るることの数にぞありける」（古今・巻第十五・恋歌五・八一八／よみ人知らず）、「海人舟の舳あまに繰くり積める網の目はつらき心の数にぞありける」（夫木抄・卷三十三・雑十五・一五八二九／よみ人知らず）などがあるが、それらが専ら数量の多さを詠んでいるのに対し、当歌は「四」という実数に係る点において、固有のものがあるう。

【通釈】

「これから何年先までも、ぜったいに忘れなさるなよ」と言い置いて、四か月になるという頃に戻ってきて、呉竹に結んで手紙をよこしたので（詠んだ歌）、

15 あなたが「忘るなよ」などと、あんなにも強く「なよ」という言葉を言い残していったのは、なよ、竹にちなんで、節と節とを隔てる「間ま」にかけて、あなたと私との仲を隔てる「四よ」月という期間を示すためのものだったのですね。

【補説】

相手に皮肉を放つに向けて、いかにも凝ったといえは凝った一首である。それにしても相手の言葉尻を捕らえての、この、即時的でありながらも理詰めで言い寄り言い放つ話法、などと言えば、外ならぬ『枕草子』にまさに枚挙に遑なき事象として、今さらの事柄に属そうが、それがかく、いわば詠法にまで及んでいのように思えてならないのである。

また、そうした話法なり詠法なりが、夙に目加田さくをが指摘した注とおり、一定の歌人圈ないし作家圈、あるいは親族圈のなかでの父・元輔の日常の会話を基盤とするものであったとすれば、当歌はその意味においても、興味深い一首であると言えよう。

なお、詞書における表現の類似性、あるいはそこに指し示された状況の類同性に鑑みて、前歌と当歌との連繋の厳存は疑うべくもあるまい。

【注】「清少納言の教養の源泉」（『国文学解釈と鑑賞』第42巻13号、一九七七年一月）。